様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：２２３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2020
課題番号：１５Ｋ１１５１１

研究課題名（和文）研究指導能力向上のための『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』の開発

研究課題名（英文）Development of Evaluation Scale of Research Guidance Process : For Master of Science in Nursing to Improve the Ability of Research Guidance

研究代表者
松田　安弘（MATSUDA, YASUHIRO）

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授

研究者番号：１０２９０５４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「研究指導過程評価スケール（看護系大学院修士課程用）」を開発することである。調査には25質問項目から成る５段階リカート型尺度を作成した。研究対象者390名に質問紙を配布し、325名から回答を得た（回収率83.3%）。このうちの有効回答308部を分析した。結果は、クロンバックα信頼性係数が、0.972であり、尺度が内的整合性を確保していることを示した。また、尺度総得点と授業過程の質、研究指導に対する満足度、目標達成度には相関があり、尺度が基準関連妥当性を確保していることを示した。さらに、文献検討に基づき設定した２仮説が支持され、尺度が構成概念妥当性を確保していることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学教員の研究指導能力向上が求められる現在において、その能力向上のための具体的な方法は明確になっていない。大学院生は、教員との関係性に多大な影響を受けるため、院生との知覚の一致が不可欠であり、教員は学生の知覚を反映しつつ自身の研究指導を改善する必要がある。しかし、研究指導の改善策を見いだすことができる知見は皆無である。開発を目ざす尺度『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』の活用は、院生の修士論文完成、ひいては学位取得への支援に責任を持つ教員の研究指導能力を確実に向上させるための手段となる。究極的には、教員から指導を受ける学生の研究能力の獲得に寄与し、大学院が提供する教育の質を保証する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop the “Evaluation Scale of Research Guidance Process (for the master's program of the graduate school of nursing).” For the survey, a 5-step Likert scale consisting of 25 question items was created. Questionnaires were distributed to 390 people selected by the convenient sampling method, and responses were obtained from 325 people (for a recovery rate of 83.3%). Among these, 308 valid responses were analyzed. The results showed that the Cronbach's α reliability coefficient was 0.972, indicating that the scale ensured internal consistency. There was a correlation between the total score of the scale and the quality of the lecture process, degree of satisfaction with the research guidance, and degree of achievement of goals, indicating that the scale ensured criteria-related validity. Furthermore, it was confirmed that two hypotheses sets based on the literature review were supported and that the scale ensured the construct validity.

研究分野：看護教育学

キーワード：研究指導　尺度開発　修士論文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

修士（博士前期）課程（以下、修士課程と略す）を設置している看護系大学院は、大学数の増加とともに急増し、現在 152 校に及ぶ。また、平成 10 年以降、各大学院の特性に応じた大学院入学資格の弾力化と入学者選抜実施方法等の改善が求められ（大学審議会，1998）、学士の学位を有しない者や職業活動と両立しながら大学院に進学する者も年々増加している。一方、大学院数の増加は、研究指導に携わる看護学教員の不足をもたらし、研究指導の経験や能力が不十分な教員が研究指導を展開せざるを得ない状況を生じさせている。このような状況の中、教員は、多様な背景を持つ学生個々の研究への興味・関心や学習への準備状態に応じた指導を展開し、修士論文完成へと導く責務を負う。また、修士課程に入学する学生は、研究に取り組む初学者であるため、博士課程の学生に比べて自律的に研究を進めることが難しく、教員による研究指導を頼りにしながら論文を作成していく。しかし、教員の研究指導に対する学生の知覚は、教員のそれと一致するとは限らず、研究指導の過程においてアカデミック・ハラスメント等の問題を誘発してしまう可能性をもはらむ（大学評価学会，2007）。また、研究指導に問題が生じた場合、学生の研究の継続が困難になり、休学や退学に至ることもある。このような状況を招かないためには、入学試験のあり方や選抜基準の検討、研究指導担当教員の選定基準等を検討するとともに、教員自身の努力によって改善可能な研究指導の質を高めることが急務である。

大学院教員の研究指導の改善に向けた取り組みは、イギリスの「教員・教育能力開発協会(SEDA)」が、研究指導上の課題（Wisker,G. et al，1999）を明示したことを契機に、オーストラリアやアメリカの大学院（James,R. et al，1999，The University of Washington，2005）が、研究段階別の指導方法や指導上の留意点等を掲載した研究指導ハンドブックを作成し、これを活用した独自の活動を進めている。この活動の中で特に強調されているのは、学生の視点に立った研究指導の必要性である（Warker,G.，2008）。しかし、先行研究の多くは、研究課題の焦点化や適用する研究方法等、研究段階に関わる内容への指導にのみ焦点を当てており、学生の視点に立った指導の展開やその展開過程で生じる様々な問題の解決を導く研究成果は未だ産出されていない。これらは、教員の研究指導の質改善・向上に向け、研究段階に関わる内容への指導にとどまらず、指導を受ける学生の視点を指導の展開に反映させる必要があることを示唆する。看護学教員個々が、学生から得た研究指導に対する評価結果をもとに、自身の研究指導の良否を査定し、その質を改善する手段を持つことができれば、研究指導により生じる問題を未然に防止し、学生との健全な関係性を維持しつつ質の高い指導を展開できるようになる。また、その結果として、学生の研究能力の獲得と修士論文完成を導き、ひいては学位取得への支援を責務とする教員の研究指導能力を確実に向上させることができる。本研究の研究分担者（舟島）は、これまでに、授業に対する学生の評価基準を網羅し、学生の視点を反映した授業過程評価スケールを複数開発している（舟島,2009)。また、多くの研究がこれを活用することにより、学生の要望を反映した授業を実現し、授業の質を改善できることを実証している。そこで本研究は、これらの研究経験とそれによる知見に基づき、修士課程学生の視点を反映した「研究指導に対する評価基準」を解明する。

また、この評価基準を基盤に、信頼性と妥当性を確保した『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』を開発する。

２．研究の目的

１）質的帰納的研究を通し、看護学修士課程において研究指導を受ける学生の視点を反映した教員の「研究指導に対する評価基準」を解明する。

２）１の成果を基盤に、『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』を開発し、その信頼性と妥当性を検証する。

３．研究の方法

１）「研究指導に対する評価基準」の解明とその信頼性検討

①Berelson,B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用い、「研究指導に対する評価基準」を表すカテゴリシステムを形成する。

②質的研究及び研究指導経験を持つ研究者２名によるカテゴリへの分類の一致率をScott,W.A.の式に基づき算出し、カテゴリの信頼性を検討する。

２）『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』の作成

①解明した「研究指導に対する評価基準」を基盤に、『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』の質問項目の作成と尺度化を行う。

②研究指導に携わる看護学教員、尺度開発の経験をもつ研究者 10 名程度から構成される専門家会議を実施し、スケールの質問項目の妥当性、表現の適切性等を検討する。また、専門家会議を経て修正したスケールを用いて、看護系大学院修士課程の修了生 30 名を対象にパイロットスタディを実施し、その内容的妥当性を検討する。

３）『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』の信頼性・妥当性の検証

①『研究指導評価スケール－看護学修士論文用－』を用い、全国の看護系大学院の修士課程の修了生を対象に質問紙調査を実施する。

②収集したデータを基に、項目分析を行い、尺度を再構成する。また、尺度全体及び下位尺度のクロンバックα信頼性係数の算出による内的整合性の検討、構成概念妥当性の検討を行う。

４．研究成果

１）第１段階として、修士課程修了後５未満の者 656 名を対象に質問紙調査を行い、看護教育学における内容分析を用いて、学生が知覚する「良い研究指導」、「良くない研究指導」を質的帰納的に解明した。その結 果、「良い研究指導」を表す 49 カテゴリ、「良くない研究指導」を表す 57 カテゴリが形成された。第２段階は、第１段階において明らかになった 49 カテゴリと 57 カテゴリを合わせ、意味内容の類似性に基 づき分類・整理し、「研究指導を評価する基準」を表すカテゴリとして命名した。カテゴリの信頼性は、研究者 ２名によるカテゴリ分類への一致率をScott,W.A.の式に基づき算出し、検討した。

質問紙回収数 314 部（回収率 47.9%)のうち回答のあった 289 部を分析対象とした。対象者の年齢は平均 39.7 歳（ SD8.8)、大学院の所在地等は多様であり、論文作成に関する科目は特別研究、課題 研究を含んだ。また、学生が研究指導を評価する基準の分析の結果、研究指導を評価する基準を表す[就学期間内の 論文完成に必要な研究推進計画の明示とその個別化の有無]、[学生からの連絡への確実かつ迅速な返信の有無]、[研究上の問題に対する責任の負担と転嫁]等 25 カテゴリが形成された。カテゴリへの分類の一致率は 70%以 上であり、カテゴリが信頼性を確

保していることを示した。

２）上記１）の質的帰納的研究を基盤とした 25 質問項目から成る５段階リカート型尺度を作成した。便宜的標本抽出法により抽出した対象者 390 名に質問紙を配布し、325 名から回答を得た（回収率 83.3%）。このうちの有効回答 308 部を分析した。結果は、クロンバックα信頼性係数が、0.972 であり、尺度が内的整合性を確保していることを示した。また、尺度総得点と授業過程の質、研究指導に対する満足度、目標達成度には相関があり、尺度が基準関連妥当性を確保していることを示した。さらに、文献検討に基づき設定した２仮説が支持され、尺度が構成概念妥当性を確保していることを確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山下暢子、舟島なをみ、松田安弘、中山登志子
２．発表標題 大学院修士課程に在籍する学生が研究指導を評価する基準の解明
３．学会等名 日本看護科学学会第39回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山下暢子、舟島なをみ、松田安弘、中山登志子
２．発表標題 大学院修士課程に在籍し研究指導を受ける学生が知覚する教員の「良い研究指導」－論文完成を目ざす学生の理解－
３．学会等名 第50回日本看護学会－看護教育－学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山下暢子、舟島なをみ、松田安弘、中山登志子
２．発表標題 大学院修士課程の学生が知覚する教員の「良くない研究指導」の解明－学生と教員の健全な相互行為の展開に向けて－
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	舟島　なをみ (Naomi Funashima) (00229098)	新潟県立看護大学・看護学部・教授 (23101)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中山　登志子 (Toshiko Nakayama) (60415560)	千葉大学・大学院看護学研究科・教授 (12501)	
研究分担者	山下　暢子 (Nobuko Yamashita) (30279632)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授 (22304)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関